

横山公男の「宗教」をとりまく創造活動

—建築家・横山公男の建築研究—

The Design Works Of Yokoyama Kimio Surrounding The “Religion”

— A study of The Architect Yokoyama Kimio —

建築デザイン分野 沼久内麻由

建築家・横山公男は、大石寺の作品に対する印象が強く、外観の造型に注目して語られることが多い。そんな中、大石寺建立以降の日蓮正宗の末寺の作品をみることで、設計に内在する諸条件の解決の可能性を室内の空間に求めていたことがわかり、大石寺の作品でも同じことがいえた。横山は、生涯を通してモダニストとして位置づけることができる。そして、生涯 252 作品もの宗教建築を残した功績があり、宗教を考え続けた姿勢は他のモダニストとは違う人物であったといえる。

We receive a strong impression to work Daisekiji of Kimio architect Yokoyama. In such a thing to speak with a focus on the molding of us appearance, it is possible to see the work of the branch temple of Nichiren Syousyu of Daisekiji later erected, that it had asked the possibility of resolution of the conditions inherent in the design in a room of space is to understand, the same thing has said also the work of Daisekiji. Yokoyama, can be positioned as a legitimate modernist throughout life. And, there is achievement who left the religious architecture of life 252 work also, I said that the attitude that kept thinking the religion was a person different from the other modernist.

1.はじめに

横山公男(1924-2009)は、戦後の日本における建築家の一人である。幼い頃から日蓮正宗の末寺である浄園寺で生活し、宗教の信仰を身近に捉え、生涯を通して日蓮正宗の建築を設計し続けた。一般には、代表作である大石寺の伽藍を一貫して設計したことが評価され、1964年度日本建築学会賞(作品)を受賞しており、当時の学会では有名であった。そして、2013年から、連合設計社横山公男建築設計事務所にあった図面・スケッチ・写真といった主要な史料が、JIA-KIT 建築アーカイブス研究所で保存されている。

その資料によると、横山は、1972年に大石寺全体計画の最終段階とされる正本堂が建立され、伽藍の計画が落ち着いた後も、大石寺正本堂建立以降も多くの作品を設計していたことが明らかとなった(図-1)。

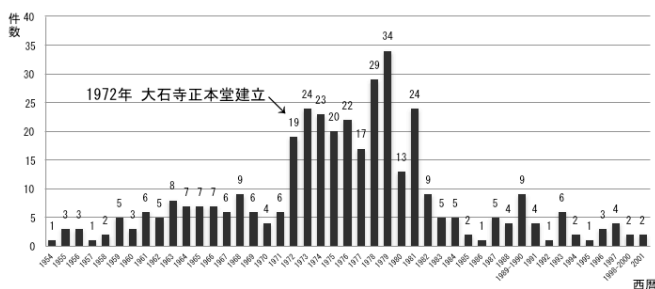


図-1 時代別作品数

また、横山公男に関する先行研究は、雑誌や新聞、書籍での作品解説を中心とした断片的な論評が多い。横山の建築作品がまとめて論評された書籍には、『現代日本建築家全集 20』がある。この書籍は、相田武文が個々に 16 作品の解説と、大石寺の伽藍を訪れた順路で評価を加えている。他に、横山の設計した大石寺正本堂建立以降の多くの作品に対する論評はない。

さらに、横山は、大石寺という設計段階で象徴性を求められる建築を設計していた。そのため、作家性という言葉で表されることが多く、横山の建築に対する評価も、外観の造型が取り上げられることが多い。

そこで本研究は、具体的な設計行為を伝える建築作品を軸に、形態の分析を行う。そして、大石寺という横山の設計作品の中でも特殊な作品に比べて、横山の晩年の作品はどのようなものであったのかを理解することで、大石寺の作品や横山の志向を正しく理解するための一助とする。

2. 研究の史料について

主要な資料は、連合設計社横山公男建築設計事務所にあった図面・スケッチ・写真、及び横山の作品

掲載雑誌である。2013年から、JIA-KIT 建築アーカイブス研究所で保存されている。

大石寺一連の作品分析の際は、雑誌の文献資料から、横山の設計態度や具体的な形をみていく。また、大石寺正本堂建立以降の日蓮正宗の全国末寺の分析の際は、文献資料がないため、図面・スケッチ・写真資料から具体的な形をみていく。

表-1に分析作品一覧をまとめた。ここで取り上げた作品は、「横山公男+連合設計社作品集1輯～4輯(未発表)」の宗教建築を対象としている。本の内容の多くが写真である。それと合わせて、図面・スケッチと、河合誠氏のヒアリング内容を使い、具体的な形をみていく。

3. 横山の宗教建築に携わる生涯の姿勢

本章では、横山の宗教建築に関する言説を読むことで、横山は、宗教・日達上人・宗教建築・建築家・信者のそれぞれの関係性を理解することで建築を設計していたことがわかった。教説に基づき、信者に近い立場で新しい宗教建築の様式を創造しようとする姿勢で設計していたことが明らかとなった。

(1)横山公男の立場

横山が手掛けた大石寺一連の作品は、約700年の歴史をもつ日蓮正宗の信者団体の一つである創価学会が勢力を伸ばし、御供養という形でその総本山に建設したものである¹⁾。横山は、創価学会の成長と一致するかのように一連の総合計画である施設の設計と伽藍配置を手掛けていた²⁾。そのため、横山に対する従来の認識は、創価学会の建物を建てた人物とされる。しかしながら、横山は小学校1年から6年まで母とともに、日蓮正宗の末寺である浄円寺と

いう住職不在の寺の留守番をするなど、創価学会の会員ではないけれども、日蓮正宗の信者であった。さらに、日達上人の娘と結婚している。日達上人は、1959年に日蓮正宗管長・大石寺住職、法主に就任している。創価学会の根底にある思想は、日蓮正宗に起因するものであることを考慮すると、「宗教」に対する横山の考えを理解する前提として、横山が宗教建築を設計し、「宗教」について考える際に、その根底にある考えは日蓮正宗のものであるといえる。

(2)日達上人の求める様式

施主である日達上人の思想から日蓮正宗の求める宗教建築について考えていくと、教団として要求する具体的な建築様式は存在しない。日達上人は、近代建築に興味をもち、時流に合致した合理的な建築を目指しており、従来のような様式に固執しない宗教建築の実現を横山に託し、日蓮正宗の新しい様式を創造したいという信念を持っていた。それを担った横山は、日蓮正宗の既存の固定的な様式が存在しないことに悩みながらも、生涯一つの宗派の設計に取り組み、合理的で新しい日蓮正宗の様式を創造することを試みたといえる。

(3)著述からみる宗教建築の捉え方

宗教建築についての横山の考えを端的に要約すると、信者などの人々が神への信仰を捧げる場であり、神への信仰のしるしとしている。ここで言う神とは宗教における信仰の対象のこと。さらに神の定義は時代によって変容しているという。横山は自身の言説でも頻繁に使っている神という存在を、歴史上の様々な論者の言葉を引用しながら、神は創られたものではなく、亡びもしないもの³⁾と一般的な形で理解しており、宗教や日蓮正宗に対する認識もこれに

表-1 分析対象史料一覧

西暦	※1 作品番号	作品名称	作品履歴				保有史料		
			構造	延床面積	所在地	備考	※2 作品集収録	図面枚数	スケッチ
1955	3	大石寺宝物館	RC造2階	66㎡	富士郡上野村	解体(時期不明)	○第一輯	-	
	4	大石寺宝蔵(奉安殿)	SRC造2階	972㎡	富士郡上野村	一部解体(時期不明)	○第一輯	8	
1958	10	大石寺大講堂	RC造6階B1	9036㎡	富士宮市		○第一輯	15	○
1960	18	横山公男邸	RC造3階	131㎡	東京都文京区	解体(時期不明)	○第一輯	7	
1961	20	大石寺大化城	RC造3階	4321㎡	富士宮市	1988年解体	○第一輯	12	
1963	31	大石寺大客殿	RC造3階	9809㎡	富士宮市	1995年解体	○第一輯	14	○
1965	46	大石寺六壺	RC造・PC造平屋	330㎡	富士宮市	1995年解体	○第一輯	11	○
1966	52	大石寺総坊第1期	RC造・PSC造3階	2棟 2310㎡	富士宮市	第1期～第3期共通 1987年解体	○第一輯	11	
1967	60	大石寺従業員住宅・桂寮	RC・木造2階	525㎡	富士宮市		○第一輯	7	
1972	105	大石寺正本堂	SRC・S PC・PS RC造3階	39368㎡	富士宮市	1998年解体	○第二輯	69	○
1975	168	法道院	SRC造6階	2230㎡	東京都豊島区		○第三輯	15	○
1976	180	日向本山定善寺本堂	RC造平屋	425㎡	日向市		○第三輯	11	
	188	妙雲寺	RC・木造2階	701㎡	岡山市		○第三輯	24	
1977	207	立正寺	SRC造3階	1172㎡	福岡市		○第三輯	8	
1979	253	西大宣寺	RC造3階	992㎡	鹿児島県天保山町		○第三輯	8	
	260	本源寺	RC造平屋	277㎡	宮城県内海		○第四輯	5	
	269	(仮称)西条寺院・一心寺	木造平屋	235㎡	西条市		○第三輯	10	
	274	大恩寺	木造平屋	277㎡	多久市		○第三輯	-	
1980	286	昭倫寺	RC造2階	346㎡	東京都杉並区		○第三輯	-	
	289	大法寺	RC・S造2階	892㎡	旭川市		○第三輯	10	
1981	291	蓮興寺	RC・木造2階	405㎡	沼津市		○第三輯	9	
	293	讃岐本門寺大坊	RC造2階	1020㎡	香川県三豊		○第三輯	11	○
	306	仏骨寺	木造平屋	229㎡	塩原市		○第三輯	5	
	307	妙瀧寺	S・木造2階	938㎡	松山市		○第三輯	18	
	309	深教寺	RC造平屋	262㎡	種子島市		○第三輯	17	
	312	浄妙寺	RC造3階	1019㎡	大阪市都島区		○第四輯	10	○
1983	327	奥修寺	RC造3階B1	1811㎡	東京都足立区		○第四輯	12	○
1984	328	法清寺	RC造平屋	500㎡	千葉県一之宮		○第四輯	24(三門・外桶含む)	○
1985	333	本土寺	RC造3階	1000㎡	大分市		○第四輯	18	
1986	335	広説寺	RC・木造2階	661㎡	小平市		○第四輯	12	
1987	336	妙縁寺	RC造2階	1549㎡	東京都墨田区		○第四輯	17	○
1988	343	真光寺	RC造2階	1378㎡	千葉県市川区		○第四輯	10	○
計	32件(378件中)								

※1 作品番号は、論文の巻末資料に掲載した横山公男の設計した378作品を対象とした「建築作品一覧、及び保有史料一覧」の番号に対応
 ※2 「横山公男+連合設計社作品集(未出版)」第一輯(1955-1972)第二輯(1966-1974)第三輯(1971-1981)第四輯(1979-2001)

裏打ちされたものであったと考えられる。横山は、現在の視座というフィルターを通して過去を眺めることで歴史が構築されるという考え方は建築にも当てはまり、建築における分析や調査の重要性を認めながらも、宗教建築においても建築家が宗教をどのように理解しているかが建築様式に影響すると考えていた。これを踏まえると、横山は宗教建築の在り方について、横山は信者に近い立場で教説に基づく建築を設計することを心がけていたといえる。

4. 大石寺

本章では、大石寺の設計において、横山が室内の空間に諸条件の解決の可能性を探ったモダニストであることを明らかにした。まず横山の言説から設計する際に、自己表出のような作家主義を嫌い、諸条件を解決することで設計してきたことを明らかにした。そして、具体的な造型について室内の空間に対する配慮が伺えることを示した。

(1) 建築界に内在する問題から方法論へ

横山は、近代にみられる建築の発展から宗教建築だけが取り残されているという解釈を示している。そして、昔からある社寺建築の様式にみられる技術や表現は認めながらも、宗教建築を設計する際に建築形態を模倣するといった創造を怠った設計態度を批判している。そして、寺院側と共に新しく建てられる建築の創造を成し遂げることが建築家には求められるとしている。

また、機能的で合理的な設計は当たり前とし、それよりも人間の内側の感情的な部分から設計を行うことが重要であるため、建築には必ず創造が伴うといった考えを持っている。さらに、様式主義・機能主義・合理主義に偏った設計態度の批判を口実にした、コマーシャルイズムや形態を優先するといった芸術至上主義者のような自己表出をする作家主義を批判している。⁴⁾

このような当時の建築界に内在する問題とされた設計の仕方に自身は当てはまらないという見解を横山は持っていた。そのため、横山は宗教建築という必然的に象徴性のある建築を設計するにあたり、自分勝手な作家主義にならないためにも建築設計に関わる多くの諸条件をよく吟味し、設計する上で多くの課題を解決しようと試みていたといえる。

(2) 諸条件から形態へ

大石寺9作品の分析から建築設計に内在する多くの諸条件には、(1)経済上の問題、(2)耐火上の問題、という基本的な条件から、(3)宗教と社会に内在する問題という横山にとっての生涯のテーマとなるものまで多岐にわたる。

その中でも、大石寺宝蔵と大石寺六壺は、(3)の課題を解決する糸口となるような特殊な条件が与えられた。大石寺宝蔵では、施主から周辺の環境に調和し、仏教建築としての性格を表現したもの⁵⁾という条件が要求されていた。それに答える形態を、丸みのある天井の表現にしている。これは、宝蔵以降の他の作品でも多く見られ、横山の宗教建築にみられる特徴の一つである(図-2,3)。また、大石寺六壺では、再建当初から勾配屋根で本瓦葺きの木造日本建築であること⁶⁾という施主からの条件があった。単に木造にするのではなく、木造とコンクリート造を併用し



図-2 宝蔵 本堂写真



図-3 宝蔵 外観写真



図-5 大化城 階段室写真



図-4 六壺 外観写真



図-6 大講堂 本堂写真



図-7 大客殿 外観写真



図-8 大客殿 本堂写真



図-9 総坊 外観写真



図-10 正本堂 妙壇写真



図-11 正本堂 外観写真

た構造的な表現を試みている。天井の勾配を変え、めくれ上がるような形で、屋根の厚さの調整をしている。これは、伝統的な社寺建築とは妻の納め方が違い、横山は日本の昔からある様式ではないことを意図して設計している(図-4)。

また、施主から昔からある社寺建築の様式を求められていない建物でも、横山は、様式主義に対する解答を示す一貫した姿勢があった。大講堂では、本堂の天井模様の創作に力を入れ(図-6)、大化城では、燃えない材料としてではなく、鉄筋コンクリートを素材として表現している(図-5)。また、大石寺大客殿(図-7,8)では、貝殻のようにシェルを2枚合わせた形態を成り立たせるために、構造的な解決をしている⁷⁾ことや、大石寺総坊第1期(図-9)では、プレハブ方式の徹底と、リフトアップ工法を手段として用いている⁸⁾。さらに、大石寺正本堂(図-10,11)では、人間の行動する目的に合った床を制限無く自由に設定できるような大屋根という6000人を収容できる大規模な新しい構造が工夫されている⁹⁾。

このように、大石寺の設計では、多くの問題や課題を解決し、材質や工法を建築に反映することで当時の近代建築の性格を宗教建築に表し、構造力学や施工技術といった、当時の技術を駆使して独自性のある形態をつくる姿勢を有していることがわかる。その点に、様式主義に対する解答を示す一貫した姿勢があったといえる。

5. 正本堂建立以降の日蓮正宗の全国末寺

本章では、横山の晩年の作品を分析すると、外からみた形態よりも、室内の空間を重視した設計を行っていたことがわかる。それは、室内の包み込むような空間であるといえる。

(1) ロマネスクについて横山の理解

横山は、ロマネスクをはじめとする西洋の建築様式や思想について、自身の著述で頻繁に言及している。その中でも、11世紀から12世紀後半にかけてのクリュニー会修道院とシトー会修道院の活発な建築活動である(1)華麗なクリュニー会修道院と簡素なシトー会修道院の建築上の違い、(2)ピエール・アラベールとベルナルの建築観を巡る対立、という中世ヨーロッパ時代の建築上の動きに興味を示している。華麗な第Ⅲクリュニー修道院を設計したピエール・アラベールは聖堂は美しく飾らなければならないという立場である。対して、シトー派のベルナルは、簡潔な外観を良しとした立場である。豪華に飾ると費用をかけ続けることになり、人々の祈る心をそらせてしまう¹⁰⁾というベルナルの見解に、当時の日本社会が物を買集めお金を惜しみなく使う

物質主義社会であった¹¹⁾という背景と重ね合わせ共感していた。

さらに、横山の論考によると、現代の宗教建築観には、(1)宗教は現代人の日常生活に積極的な役割を果たさない非日常的な存在、(2)宗教は精神・心の中の問題にしか過ぎない、という二点の考え方が普及しており、宗教を日常生活と離れたものであると捉え、無関心となっている人が多い。横山はこの点を嘆き、宗教と社会の関係が薄くなるにつれて、神と人との間柄も疎遠になっていると考えている。横山の考えによれば、このような社会状況の中でも、日常生活に宗教が活着しているという考えをもつ実際に信仰している人々が、日蓮正宗には多く存在している。¹²⁾

そして、ロマネスクとは10世紀末期から、12世紀にかけての芸術様式であり、中世ヨーロッパを代表するものである。日常的な信仰と教会とが一体化していた。これは、現代の日本における宗教状況とは対極をなしており、横山が理想とした宗教建築は中世ヨーロッパのような生活を信仰が密接に相互に関連するような状況で成立するものであったことがわかる。

(2) 創造活動の推移

さらに、1975年を分岐点に木造の作品が増加する(図-12)。

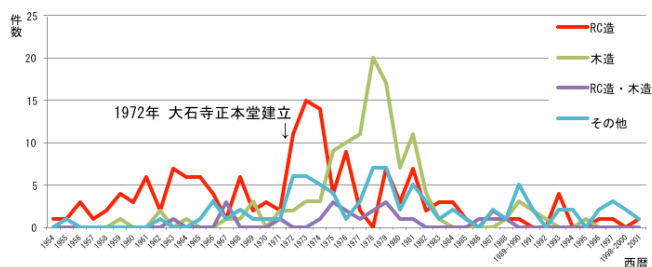


図-12 構造種別作品数

理由は、宗派の発展が急速に進んだことに伴い、地方寺院の建設のため建設地と建設棟数が増え、それに伴う建設資金のなさが一つの原因と考えられる。周知のように、1972年以前は大石寺の一連の作品を手掛けていた時期であり、建築資金も多く存在したと考えられる。それ以降は、横山は地方の寺院建築を任されることが多くなったことは、建設地の分布をみればわかる。建築資金が少ない案件を木造の建物で建てることを余儀なくされていたと考えられる。横山は、宗派の発展に呼応するように活動を行っていた。

(3) 正本堂建立以降の日蓮正宗全国末寺の形態

22作品の分析を行った結果(表-2)の考察を行った。

法道院(図-13)は、坐敷ではなく椅子式を取り入れ

で設計したお寺である。椅子式を優先している点に、昔からある伝統的な社寺建築の様式に固執するのではなく、新しい宗教建築の様式を作ろうとする大石寺設計から通ずる姿勢が伺える。さらに、法清寺(図-14)や深教寺(図-15)では、材料として使用するコンクリートを、そのまま塗装せずに残しており、素材の表現を設計のデザインに取り入れている。これは、大石寺の大化城に通ずるデザイン手法が伺える。横山の理想とした新しい宗教建築の様式を、当時の技術や、材料を用いることで実現しようとしたと推測できる。

次に、形態の特徴について考察していく。横山は、お寺という特殊な建築を設計していたため、信者が出入口で混雑しないように回遊性を意識した平面計画は当たり前のように行っている。また、窓や屋内や入り口のドアには、半円アーチのデザインが多くみられた。室内の天井は、横断アーチのような曲面を基調としたデザインが多く見られる。特に、蓮興寺(図-17)あたりから、折り上げ格子天井をもつ形態が用いられるようになる(図-16, 17, 19, 21, 23)。さらに、横山は、円形・半円形・正方形・正八角形などのシンメトリーな幾何学形態を自身の設計する上でのデザインの一つとして多用している(図-14, 15, 20)。

周知のように、窓の半円アーチや天井の横断アーチや幾何学といった形態は、ロマネスク建築の特徴である。これらのデザインは、大石寺正本堂建立以降に顕著に表れだした。ロマネスクの時代、幾何学や数学や音楽の理論は、教会堂建築を形作るために、記号的にデザインに取り入れられた。そして、これにより、象徴性が作られたのである。その中でも、神学者・聖職者・修道士にとって、神性へと導いてくれる最も高度な学問は、数学で、数との組み合わせの科学であった。そのため、寸法として数に関係する建築は、数の科学を通して、天空に示された神の摂理の学問である天文学と、祈りの行為であり、数の科学でもあった音楽にも結びついていた。そして、クリュニー第Ⅲ教会堂は、音楽学者である修道士グンゾが数学者のエゼロンの助けを受けて、構想した建築であり、教会堂の全体や各部の寸法に数的特徴性が仕込まれていた。これらは「神の完全さ」の象徴とされ、この時代の宗教建築に共通してみられた。上記のロマネスクの説明は一般的な事柄である。横山が、頻繁に自身の宗教建築に関する論考の中で、クリュニー第Ⅲ教会堂について、神や宇宙について述べていたことから、横山は上記のロマネスクの一般的な形態について理解したと考えられ、日蓮正宗の末寺のデザインはロマネスク建築に影響



図-13 法道院 外観写真



図-14 法清寺 外観写真



図-16 妙源寺 本堂写真



図-15 深教寺 外観写真



図-17 蓮興寺 本堂写真



図-19 本土寺 本堂写真

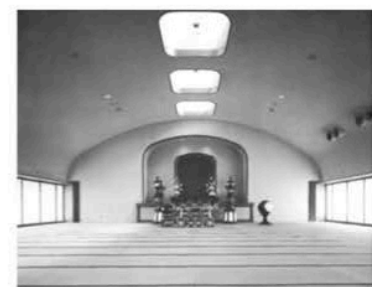


図-18 立正寺 本堂写真



図-21 妙縁寺 本堂写真



図-20 本源寺 本堂写真



図-22 真光寺 本堂写真



図-23 広説寺 本堂写真



図-24 昭倫寺 本堂写真

されていたと推測できる。

6. 結論

横山は、生涯、日蓮正宗の宗教建築の新たな様式を創り出そうとしたモダニストであった。

大石寺正本堂以降の日蓮正宗の末寺は、外からみた形よりも、室内の包み込むような空間に、横山の空間という可能性にかけた設計手法がより洗練された形で表れている。晩年の末寺の作品をみたことで、今までの大石寺一連の作品をみて、造形に特化した建築を作る人物であるという横山の評価の一面に対して、室内の空間を重視したモダニストであったと位置づけることができた。

さらに、252 作品もの宗教建築を残した功績があり、生涯宗教を考え続けるという姿勢を持ち続けるという点で、横山は他のモダニストとは違った建築家であったといえる。

註

- 『創価学会四十年史』創価学会四十年史編纂委員会,1970年11月18日,非売品
- 横山公男『正本堂のデザイン』聖教新聞社,1974年10月12日
- 横山公男「根源にあるもの」『現代建築家全集 20』三一書房,1972年6月30日,p.81
- 横山公男「建築における人間の問題 大石寺宝蔵の竣工にあたって」『新建築』第31巻第4号,1956年4月,p.22
- 横山公男「大石寺宝蔵 われわれの見解」『新建築』第30巻第10号,1955年10月,p.30
- 横山公男「大石寺“六壺”」『建築文化 No.223』第20巻第5号,1965年5月,p.89
- 横山公男「宗教空間の意味」『正本堂写真集』聖教新聞社,1972年10月1日,p.201
- 横山公男「大石寺大客殿」『建築文化 No.211』第19巻第5号,1964年5月,p.89
- 横山公男「大石寺総坊中間報告」『建築』第68巻第4号,1966年4月,p.109
- 河合誠「正本堂の構成について」『近代建築』第27巻第3号,1973年3月,p.68
- 横山公男『宗教建築を考える』未出版,1983年11月25日,p.24
- 横山公男『荘厳としての建築 1』未出版,1985年,p.17

表2- 日蓮正宗全国末寺の作品分析一覧

西暦	作品履歴 作品名称	作品分析
1975	法道院	平面図を見ると、1階にはピロティ・倉庫、2階には本堂・倉庫・受付、3階には和室、4階には厨房・茶の間・居間・客間・書斎・女中室、5階には所化部屋、6階には倉庫がある。ピロティの中央には規則正しく柱が4本立っている。本堂はシンメトリーな平面構成をしている。さらに、本堂の入り口辺りに壁の仕切りがあり扉が4つある。これにより、本堂の出入口には回遊性が生まれ、入り口の混雑が解消することが意図されている。また、本堂は椅子式であり、日本の昔からある社寺建築とは違い、伝統的な形態に固執しない新しい宗教建築を試みていることが伺える。建物外観は水平垂直の幾何学的な形態をしている。
1976	日向本山定善寺	小山の上の境内地の丘の上に建てられた。平面図を見ると、1階には、本堂・玄関ホール・廊下・休憩室がある。本堂は、4本の柱でささえられ、サツで囲われた開放的な空間である。天井面には輪模様が描かれている。境内はソテツが多数植栽された異国情緒に溢れている。さらに、本堂の周囲は、廻廊で囲まれ、玄関ホールと繋がっている。受付と物置で本堂に行くための廻廊が二分されているため、回遊性のある平面構成となっている。
	妙雲寺	平面図を見ると、1階には、本堂、下足室、受付、ホール、客間、寮室、食堂、居間がある。2階には、子供室がある。境内が前面道路より低いことで、本堂を高床式とし、寄棟屋根の本瓦葺である。本堂天井は、屋根に沿って上がトップライトから採光している。国道沿いのため木製パネルで囲み、若干開口面積を抑制している。中央に中庭があり、雁行配置となっているため、建物全体で回遊性のある平面構成をしている。
1977	立正寺	平面図を見ると、玄関前にピロティがあり、1階は、建物の中央に廊下を通り、玄関ホール・和室・客間・茶の間・女中室・食堂・厨房・トイレ・機械室が両サイドに配置されている。2階には、本堂・ホール・受付・和室・大広間、控室がある。3階には、和室・所化部屋がある。シンメトリーを意識した平面構成となっている。断面図を見ると、本堂と大広間の天井が曲面になっている。さらに、窓やドア、廊下の天井にも曲面を用いた表現が多用されている。風情ある街並みに配慮したデザインとして考えられた。
1979	西大宣寺	平面図を見ると、1階には、ピロティ・下足室・機械室・洗濯室・トイレがある。2階には、本堂・受付・控室・食堂・茶の間がある。3階には、客間・和室・書斎がある。シンメトリーの平面構成となっている。立面を見ると、正八角形の窓があり、本堂の三連シリンドラ屋根のアル窓が目立つ。
	本源寺	平面図を見ると、1階には、本堂・ホール・控室・和室・厨房がある。本堂の平面構成はシンメトリーである。外観の曲面のデザインが本堂の出入口にも使用されている。壁面上部に二等辺三角形の大きな窓があり、講堂の室内に光が差し込む。シンプルでデザインで横山の初期の作品を窺い知れる構成である。RCの扱いに手慣れた感じがする小品である。
	(仮称) 西条寺院・一心寺	66ヶ寺事業の代表的な桧瓦葺屋根の木造平屋建ての建物である。平面図を見ると、本堂の1階には、玄関・本堂・ホール・下足室・受付・控室二間に配置されている。別の平面図を見ると、2DKの庫裡の1階には和室・食堂・浴室がある。本堂と庫裡は、幅1m20cmほどの廊下でつながっている。本堂の平面構成はシンメトリーである。断面を見ると本堂の天井は、アールがかかっている。立面図を見ると、半円や、ダイヤ形や、正方形の特徴のある窓がみられ、シンメトリーな幾何学形態をしたものが多用されている。
	大恩寺	この建物は、66ヶ寺事業の一つで木造平屋建てである。写真のみ手元にあり、そこから読み取れることは、窓には、円形を用いた特徴が見られる。大変簡素である。
1980	昭倫寺	写真のみ手元にあり、そこから読み取れることは、室内空間は、曲面の天井が特徴的である。さらに、住宅専用で狭小の敷地、法規制と遮音のため、外観は閉鎖的な表現となっている。
	大法寺	平面図によると、1階には、玄関・広間・和室・客室・食堂・書斎・下足室がある。2階には、本堂・和室・子供室がある。断面から読み取れることは、曲面を用いた表現である。外観写真から読み取れることは、大きな半円形の窓に正方形グリッドのサッシがみられる。さらに、1階の入口の壁は内側にセットバックしており、2本の柱が均等に建てられている。さらに、柱と壁に囲われた入口上部は、アールがかかっているため、どこか西洋の建物を思い起こさせる。
1981	蓮興寺	平面図によると、1階には、本堂・玄関・下足室・広間・和室・食堂がある。2階には、和室がある。平面図を見ると、雁行した平面配置が特徴的である(図-1)。本堂は畳敷きである。断面を見ると、天井と壁のつなぎ目の辺りに特徴的な折り上げ格子天井がみられる。所具によるシルクスクリーン印刷文様入り格子天井板が張られている。
	讃岐本門寺大坊	木造の既存本堂に廊下でつながる庫裡の建て替えて建てられた。大坊とは、仏教寺院で僧侶や参拝者のために作られた宿泊施設のことである。古刹の本堂で境内には塔中が4坊ある。入母屋屋根の本瓦葺で妻にアルミダイキャストの懸魚が取り付けられている。平面図によると、1階には、受付・所化室・広間・控室・茶の間・食堂・大厨房・トイレがある。2階には、納戸がある。雁行配置の平面計画となっている。
	仏覚寺	66ヶ寺事業の一つで、40帖の本堂・8帖二間の控室・玄関受付ホールと2DKの庫裡の構成である。雁行した平面配置計画となっている。街並みに配慮して切妻屋根に瓦葺きとし、屋根の両端部に本瓦を数列並べている。白壁に腰壁には、瓦色の長方形タイルを張っている。
	妙源寺	平面図によると、1階に坐式の本堂がある。内装の天井面の折り上げ格子天井が特徴的である。入母屋屋根の本堂は、横山のスケッチブックに数多く認められる。この規模の入母屋の本堂は妙源寺が最初である。これまでは、寄棟屋根がほとんどであった。銅板平瓦葺き屋根の両妻にアルミダイキャストの懸魚がつけられている。
	深教寺	平面図によると、1階には、本堂・玄関・受付・和室・食堂がある。幾何学的な形が多用され、その一つ一つがシンメトリーである。コンクリートそのものの表現が建物全体に使われている。シンプルなデザインでまとめられていて、横山の初期の作品に通ずる手慣れたさわやかさが感じられる。
	淨妙寺	平面図によると、1階には、玄関・受付・和室・所化室・書庫・茶の間・厨房がある。2階には、書斎・控室・客間・和室・倉庫・納戸がある。3階には、本堂がある。幾何学的な形が多用され、その一つ一つがシンメトリーである。講堂の天井は3段階の曲面となっている。本堂背面上部に大きな採光窓が設けられている。住宅専用で日影規制を受け、階高を抑え屋根をマンサード型にしてじんまりさせている。さらに、建物の角が敷地内側に凹んでおり、その形も幾何学的である。外装は暗褐色のタイル張りとし、威圧感を和らげている。
1983	実修寺	平面によると、1階には、受付・寮・食堂・控室・和室がある。2階には、本堂(3階吹き抜け)・和室・子供室がある。3階には、所化室・倉庫がある。地下には、駐車場・収納庫がある。断面図を見ると、本堂の天井面の折り上げ格子天井板張りが見られる。窓の形に幾何学的な形態がみられる。住宅密集地に境内地がある都市型寺院、内陣の仏具である前机・経机・天蓋・幢幡もデザインされている。
1984	法清寺	平面によると、1階には、本堂・玄関・ホール・控室・客間・和室・食堂がある。コンクリートの表面が特徴的である。敷地南側入口からの軸線を通し、幾何学的な平面配置をしている。窓も幾何学的な形をしており特徴的である。壁を含む面と面との構成、開口部による光と影との抑え方は、内外にわたって豊かな表情を作り出している。
1985	本土寺	平面によると、1階には、玄関広間・下足室・受付・控室・和室・客間・応接室・書庫・食堂・厨房がある。2階には、本堂(3階吹き抜け)・子供室がある。3階には、空調室などの設備関係がある。内装の天井面の折り上げ格子天井が特徴的である。さらに、外壁面上部の持ち出し部分のデザインが3段となっており、装飾として使用されている。この年代は、本堂天井に折り上げ格子天井をもつ形態が特徴的である。切妻屋根鉛板平瓦葺き屋根にRC造の懸魚があしらわれている。
1986	広説寺	この建物は、RC・木造2階建てである。平面によると、1階には、受付・ホール・下足室・和室・厨房・在勤室がある。2階には、本堂・和室・洋室があり、階段で直接本堂へ入ることができる。住宅専用地区にある寺院で本堂の遮音性能を高めるべく通気窓を除きガラスブロックを採用。本堂は折り上げをもつ板張り天井がみられる。
1987	妙縁寺	この建物は、東側と南側を道路に沿い、西側に墓地、北側に高層ビルに隣接した境内地に建てられた。切妻屋根本瓦葺きの都市型寺院で、RC造3階建てで地下1階である。平面によると、1階には、広間・下足室・和室・在勤室がある。2階には、食堂・広間・応接室・和室・厨房・控室がある。3階には本堂・客殿(集会室)・寝室がある。屋根裏には書斎がある。他には、庫裡等多くの要素を盛り込んでいる。本堂は三階の折り上げのある格子天井。背面東側に大きな開口部を有している。
1988	真光寺	平面によると、1階には、本堂があり、廊下で繋がり、客殿・茶の間・和室・応接室・在勤室などの諸室が中庭を囲むように配置された平面構成をしている。2階は、和室・書斎・子供室である。回遊式の平面構成である。日本社寺建築を思わせる本堂と、隣接する中庭付きの建物が特徴的である。本堂と中庭を配した庫裏とは、つなぎ廊下で接続のひやかな平面計画。本堂は入母屋銅版瓦葺、切妻部に懸魚が配されている。天井は球面の格子天井で四本の柱で本堂を支え、三方をサツで囲んだ開放的な空間となっている。

討議

討議 [徳尾野准教授]

2点質問があります。

1点目は、大石寺の伽藍配置の話は全然出てこないけれど、横山公男は全く関わっていないのか、そして、どのように考えていたのか。

2点目は、初期の作品である大石寺はとてもル・コルビュジェと関係が深いような気がして、最初の頃はタタミのモジュールでとても端整なピロティーを持ち、最後には開放されて正本堂といったとても造形的な形態は、ロンシャンの教会に共通するものがあって、多少影響することはあったということは本編のところでも書いてあって、とても影響があったような気がするという疑問があります。

また、初期は全部タタミですよ、図面なんか分析したら尺貫法モジュールを使っているとかはなかったのかなど、もうちょっと踏み込んで分析されたら良かったと思います。

回答

1点目の伽藍配置についてですが、建物の建つ位置は元から決められていたので、伽藍の配置について横山さんが考えることはなかったと思います。後、全体的な統一性というものも、横山さんの言葉を借りると、まだ自身は未熟で一貫して統一した伽藍を建てたわけではないと述べていたことから、伽藍の配置について横山さんが考えることはなかったと考えます。

2点目のル・コルビュジェの話ですけれども、影響はあったと思います。横山さんがそれに対して言及している作品というのが大化城の設計で、ル・コルビュジェのモデュロールをタタミの寸法に置き換えて、その他の設計でもそのモデュロールを使うことがあるなども書かれていたので、言説とかでみると、コルビュジェの話は余りないですけど、影響はあったと考えます。

討議 [横山教授]

2つ質問です。1つはなんで今横山公男の研究なのか。また、研究に関して横山公男はモダニストだというのは、それはそうだろうなと思います。その根拠として室内を大切にしたら、モダニストだという風に書いてあるように思えたのですが、実際にこの写真で内部空間が多くありますが、どうみても純粋モダニストではないのではないかと思います。もう少しモダニストという意味を解釈して、ひょっ

としたら違う言葉でも良かったのではないかという気がしています。モダニストという評価の仕方ではなく、新しい評価の仕方があって、その時代の単純にみんなモダニズムという風にくくらないで、もう少し違う動きとか考え方があって、という話が彼を起点にして出来る様な気がします。それについてご意見をお聞きしたいです。

回答

1点目について、現在、横山公男の有名な大石寺一連の作品のほとんどが取り壊されてしまっていて、興味をもったというのが大きな理由です。また、丁度2013年にJIA-KIT建築アーカイブス研究所に設計事務所の資料一式が所蔵されたということが分かったので、研究の意義ではないですけど、今から研究するべき人ではないかなという点でパーソナルなモチベーションで横山公男を研究しました。

2点目について、私の中でもモダニズムとは一概には言えないのではないかとはいっていて、他に思い当たる言葉がちょっと思いつかなかったのが実際のところ。少し違和感を感じています。

討議 [倉方准教授]

今、横山先生が言われたモダニズムと室内空間の話は、昨晚も私が指摘したことで、大変重要だと思います。要するにモダニズムって言う言葉を使わないで、例えば構造的なとか、平面的なとか、大石寺の後期の作品でもいいですけど、一般に近代建築とかモダニズムというものと、横山公男の室内空間のあのような装飾は普通はモダニズムと反するものです。モダニズムと言う言葉を使わないとしたら、近代建築の構造的なことをいかしてるとか、簡素性をいかしてるとか、モダニズムという言葉を使わないで、その関係を言わないと横山公男という人物をやったことにはならないし、横山先生も言ったように、モダニズムと言っとけばいいというか、そういうことに可能性を開くきっかけになると思う。もう少し言ってみて、具体的でもいいです。

回答

後半の作品では、横山さんの特徴として、内部空間が大事で、むしろ内部が先で、裏としての外部があったのではないかという点は横山さんの特徴といえるのではないかなと思います。

討議 [吉中准教授]

コメントなんですが、木造の作品の推移がありましたけども、正本堂は曲面構造の分野で非常に有名

な構造です。そのころは、鉄筋コンクリートを曲面などに使うなど、ブームになった時期があって、鉄骨のトラスに変わっていった時代です。ダイナミックな外観っていうのはシェルが影響していて、その内部もどういう構造を使うかという点で影響されているような気がする。

討議 [吉中准教授]

正本堂が解体されたのは耐久性の問題が原因なのでしょうか。現在その場所には何もないのでしょうか。700年前に開祖して、本山はずっと木造なのでしょうか。大事なことだと思うんですけど。

回答

耐久性の問題ではないと私は考えていて、大きな理由は宗教上の内部の対立の問題だと考えています。横山さんの設計した建物とは違う新しく建てられた建物(名前は正本堂かは分からないんですけど)は建てられています。今までずっと木造であったかは分かりません。